

学会開催の主旨

家族看護の実践知の構築—サイエンス・アート・倫理を基盤として—

このたびは、多くの方々のご支援、ご協力により、「家族看護の実践知の構築—サイエンス・アート・倫理を基盤として—」をメインテーマとして、日本家族看護学会第10回学術集会を9月27日・28日の2日間、高知市文化プラザかるぼーとで開催させていただくことになりました。

日本家族看護学会学術集会も10回を迎え、家族看護の研究とともに家族看護実践も急速に発展してきております。看護学は実践の科学であり、家族看護学も実践の中に根付くことができはじめて、看護学の仲間入りをすることができると考えております。ひとりひとりの看護者が家族をケアの対象として位置づけ、家族を尊重したケアを提供することにより、家族の潜在的なパワーが活性化するのではないのでしょうか。

過日、厚生労働省が発表した2002年の合計特殊出生率は1.32と少子化は更に進み、未婚化・晩婚化が続く中、平均世帯人数は2.82人(1995年)から2020年には2.5人未満となることが予測されています。

家族の小規模化や、家族についての考え方の変化、家族内の役割分担についての考え方の変化によって家族の脆弱性が懸念される一方で、在宅医療施策が推進されることにより、家族が家族なりの生活をしていく上で多くの課題が生じると考えられます。現在の家族、そしてこれからの家族が、自分たち自らの力を育み、発揮できるようにするために、どのような看護援助・看護の実践が有効なのかを明確にしていくことは、家族看護の大きなテーマではないかと考えています。

家族看護学に基づいた実践は、科学的なデータ、看護介入のアート、そして対象に対する倫理性、の3つの要素が不可欠であるとの思いから、「家族看護の実践知の構築—サイエンス・アート・倫理を基盤として—」をメインテーマといたしました。

シンポジウムでは、家族看護学領域で実践知を構築し蓄積しつつあるシンポジストの方々に、実践や研究を通して日頃考えられている、家族看護の実践知—サイエンス、アート、倫理—についてお話しいただきます。その後、各シンポジストを囲んでの分科会を企画しております。分科会では、参加される皆様の活発なディスカッションによって家族看護の実践知をより探求できるのではないかと考えています。

また、今回の学術集会では、口演83題、示説22題という盛りだくさんの発表が予定されております。特に示説では、事例研究をご発表いただき、一つ一つの事例を通して、家族看護の実践知を探求したいと考え、原礼子先生(慶應義塾大学看護医療学部)にコーディネーターをお願いしながら、討議の時間を多く準備しております。

本学術集会を中心に、家族看護学の実践知が集約され、蓄積されていくことを願っております。皆様方と共に作成したこの抄録も、ひとつの足跡となると確信しております。

2003年8月吉日
第10回学術集会長
野嶋 佐由美